

やさしさが つながる まちづくり

このコーナーでは、地域のために一歩を踏み出し、地域の特色を活かした活動をしている団体を紹介しします。



みんなの力で、豊かな海の回復を 向島町漁業協同組合

•きっかけは?

尾道市の島しょ部や沿岸部は、干潟、内湾、磯に根付く地魚をはじめ、瀬戸内海を回遊する魚の産卵場になっていることから、季節にちなんだ多種多様な水産物が水揚げされてきました。

とりわけアサリの好漁場として知られ、昭和63年には県全体の約8割にあたる1,746トンが採れていました。しかし、その後急速に減少し、平成26年には全盛期の2%以下の20トン未満にまで落ち込んでしまいました。アサリは全国的に減少傾向にあり、魚による食害や環境の変化等が原因に挙げられていますが、特定はできていません。

こうした中、尾道市水産振興協議会では向島町漁協が主体となって、瀬戸内海区水産研究所百島庁舎の指導を受けながら、平成27年度からアサリ資源の回復に向けて、人工的な種苗生産に取り組み始めました。

•どんなことをしていますか?

アサリの資源回復には、環境に適合した稚貝を育てることも重要だといわれています。

向島町漁協の設備を使って、地元産の親貝から産卵させることから始めました。夏場に水槽で孵化した幼生に、餌を与え、約1mm程度に育った秋頃に稚貝をカゴに入れて海中に吊るし、自分たちで大切に育てました。カゴに藻が付かないように20日間に1回は掃除を行う等、寒い冬場に変な手間と苦勞が掛かります。

こうして3~4mmにまで育った3月にはいよいよ放流です。

アサリの種苗生産技術は、設備が整う研究施設では約10年前には確立されていたそうです。

しかし、地元産のアサリを自分たちの手で育てたいとの思いから、研究機関の指導を受けてきました。その結果、熱意と工夫で平成28年3月には29万2千個もの稚貝を育てることができました。



漁業者によるアサリの人工的な種苗生産は、全国的にも珍しいそうです。

稚貝は、市内の4漁協・支所に分けられ、潮に流されたり、魚に食べられたりしないように、網の袋に入れて干潟に放流しています。2年目となる平成28年度も育成方法を工夫しながら取り組んでいます。



•よかったことは?

地域の水産資源や生物多様性の保全について学んでいる尾道中学校・高等学校の科学部の生徒たちが、アサリの研究を始められたことです。6月から市や漁協等と連携する中で学習を重ねられ、施設や現場の見学、調査にも来られました。7~8月には向島沿岸の干潟で、生息する生物の生態調査に取り組みされました。調査結果は漁協や研究機関の協力を得ながらまとめられ、10月の校内文化祭でも研究内容を発表されました。今後これまでの研究結果をまとめて、向島町漁協にも報告してくれる予定です。

世代を超えてアサリを守りたいという気持ちが一つになったことは大変嬉しいことです。



•これから...

向島では高見小学校の児童、保育所・幼稚園の子どもたちと、地域の人たちが、ふるさとの美しい自然を大切にしようと、以前から海浜清掃や高見山の森づくりに取り組んでいます。海だけでなく、山や森も守り育てることが、アサリをはじめとする水産資源の回復に繋がります。

豊かな海を回復していくためには、漁業に関わる人たちだけでなく地域に暮らす人たち、みんなの力で取り組むことが大切です。できることから一歩一歩、ワンステップ・アクションで、豊かな海づくりを目指していきたいと考えています。

向島町漁業協同組合 (☎0848-44-2408)

地域の特色を活かした活動をしておられる方や団体をご存知の方は情報をお寄せください。みなさまから寄せられた情報をもとに取材し、広報等で紹介していく予定です。
☎政策企画課(☎0848-38-9435) ✉kikaku@city.onomichi.hiroshima.jp

おのみち

No.1025
2月号
Onomichi City 平成29年(2017)



特集

こうれい
幸齢社会おのみちをめざして
みんなで取り組む健康づくり